

## 「心豊かに、生きる力をはぐくむ教育の研究」

～QUを活用した集団づくりと個の育成を目指して～

### I 研究の内容

国の政策、県の政策を受け、地域に根差した教育を進めていくための甲州市の取り組み（平成23年10月に「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」が発足）も発足してから継続して研究が進められている。

市のプロジェクトの視点から本校の現状を見てみると、プロジェクトの基盤となる「集団づくり」という点では、毎日のあいさつや生徒相互の支え合いなどにおいて、さわやかな学校生活を送っている様子がうかがえる。またQUにおいても満足度群の割合が全国平均を上回っていることから、落ち着いた学校であると客観的に見ることもできる。

しかし、不登校生徒の様子を見てみると、長期欠席者が一昨年は8%、昨年は6%となり、ここ数年増加傾向にある。また学力面においても、二極化の傾向が表れはじめている。「確かな学力」を育成するためには、まずその基盤となる「学級集団づくり」への取り組みが必要だと考えられる。市のプロジェクトでもこの点については重要視している現状もある。以上のことを踏まえ、今年度は「集団づくり」というこれまでの方針を受け継ぎつつ、集団を構成する生徒個々の学力を少しずつ向上させるための研究を進めてきた。

#### \*研究の柱となる具体的内容と方法

##### (1) QUを活用した集団づくりについて

(継続実施することにより生徒を育てる活動として)

①QUアンケートを用いて、生徒の実態を把握する。

\*市のプロジェクトで各校の実践で効果のあったものを共有することが確認された

②SST（ソーシャルスキルトレーニング）やSGE（構成的グループエンカウンター）を用いた人間関係づくりを進める。

##### (2) 「SUN（ステップアップノート）」 「SUT（ステップアップテスト）」の取り組み（学力向上に関わる取り組みとして）

①授業の構造化を主とし、板書計画や指導案作り、またQU結果を取り入れた授業の検討・実践を積み重ねていく。

②一人一実践（ステップアップ授業）で検証するとともに、実践記録を残す。

③SUNの活用を検討する

a 授業の中で家庭学習とつながる働きかけの方法

b スタンバイの時間におけるふりかえり（課題設定）

この2点を大切に見ていく。

④「『3観点による評価』についての学習会」（講師を招いた学習会）を実施する。

##### (3) ESDに関する実践的な取り組み

(指導力の向上を目指して)

①ESDに関する研究授業の実施

→教科部会で取り組み内容を検討する時間を持つ。

昨年度までの継続研究をもとに、一つ一つの研究を深化させていく。

新指導要領施行を前に、本校の教育課程を見直しながら各個の実践研究を積み重ねることにより対応を模索した。

## II 成果と課題

### (1) QUを活用した集団づくりについて

今年度は新型コロナウイルスによる休校措置がとられたため、例年のような日程でQU分析を実施することができなかった。年度当初の計画についても変更することが多かったため、年間を通した取り組みが難しい年となった。そのような中でも年2回のQU検査と分析を実施することができたのは大きな成果といえる。

課題としては、各学年で行ったQU分析の結果について全体での共有を深めていく機会が少なかったことである。回覧だけではなく、職員会議等の機会を利用して全体共有の場と方法を工夫していきたい。

### (2) 「SUN (ステップアップノート)」「SUT (ステップアップテスト)」の取り組み

学力向上を目指して、市のプロジェクトと連携して上記の取り組みを通年で実施することができた。来年度は取り組み内容をさらに検討して、生徒の学習内容等に合わせた、より柔軟な取り組みを進めていきたい。取り組み内容が学年ごとに異なることがないように、年度当初の校内研究会で共通理解できるようにしていきたい。

さらに、研究授業等の指導案にQU分析の結果を記載して、その分析結果を学習に生かすことができた。来年度もQU分析の結果を授業改善や学力向上に生かすよう取り組みを進めていきたい。

### (3) ESDに関する実践的な取り組み

今年度は年度当初の計画から大きな変更があったため、教科部会を定期的に開催することが困難だった。その結果、ESDの取り組みを各教科で実践することが十分にできなかった。そのような状況の中でも道徳や社会、そして技術科の授業においてESDに関わる研究授業を実施し、学校全体でESDについて学習を進め、授業の内容や方法を共有できたことは成果といえる。

### (4) 研究のまとめと来年度に向けて

甲州市の「確かな学力育成」プロジェクトを校内研究の基盤とし、それを深化・発展させるべく1年間の研究を進めてきた。QUの分析により、普段はそのような素振りが見えない生徒も集団の中で悩みを抱えていることも発見できた。学校全体でそのような生徒に対する支援の方策を考え、それぞれの立場で生徒に接することで、確実に集団づくりや学力の向上を進めていきたい。

さらに、本校の学校全体での「基礎学力」を分析してみると、「基礎学力」が定着しているとはいえない現状がある。「学力の向上」については本校の喫緊の課題といえるため、来年度はこの点を最重要課題として研究を深めていく必要性を感じている。

来年度は「GIGAスクール」の取り組みが始まるため、その充実に向けた研究も必要になってくると考えている。通信設備やタブレットの配備が進む中、教員がその有用性を理解し、実際に授業で活用できるような研究を進めていきたいと考えている。すでに「総合的な学習の時間」や国語と社会授業等で「タブレット」の利用を進めている。調べ学習だけではなく、「思考・発表・学習ツール」としてのタブレット活用の研究を来年度は計画に入れるようにしていきたい。

来年度の研究テーマの根本ともいえる「学力の向上」や「授業改善」を進めるためには、教師が自ら学ぼうとする意識が必要になる。教師の資質向上や「授業改善」を進め、「学力の向上」に資することができるように、学校カリキュラムマネジメントの意識を持って校内研究を進めていきたい。

(研究主任 田辺 秀樹)